

〔症例2〕64歳，女性．SAH（破裂中大脳動脈瘤）に合併した未破裂瘤に対し，初回手術後11ヶ月目にclipping術を施行し転帰良好．

〔症例3〕73歳，男性．高血圧精査にて発見され，定期的な画像経過観察中動脈瘤のsize・性状の変化は無かったが，約4年でSAH（GV）発症，脳室ドレナージのみ施行したが死亡．

〔症例4〕30歳，女性．SAH（GⅢ），解離性動脈瘤と診断，発症13日目に血管内治療による親血管閉塞を企図したが，親血管が閉塞していたため保存的加療を行った．画像経過観察を継続し，現在まで親血管が閉塞したまま再発を認めない．

〔症例5〕30歳，女性．頭痛精査にて発見され，clippingおよびwrapping術を施行し転帰良好．clippingは全例subtemporal approachで施行した．術中所見を供覧し，手術留意点について検討する．

68 多発性前交通動脈瘤の2手術例

林 真司・金城 利彦・黄木 正登
公立置賜総合病院脳神経外科

【はじめに】前交通動脈に多発性に動脈瘤が発生することはまれでその報告はきわめて少ない．われわれは多発性前交通動脈瘤2例を経験したので報告する．

〔症例1〕78歳女性．Hunt & Kosnik grade II，Fisher group 3のSAH．Pterional approachで手術．動脈瘤は前交通動脈の下方と前方にあり，大きさは6 mm，4 mm，下方が破裂動脈瘤であった．GOSはMD．

〔症例2〕63歳男性．Hunt & Kosnik grade IV，Fisher group 4のSAH．Bifrontal interhemispheric approachで手術．動脈瘤は前交通動脈の下方と前方にあり，大きさは6 mm，8 mm，前方が破裂動脈瘤であった．GOSはSD．

【考察】多発性前交通動脈瘤はInciら（2005，JNS）によると4.1%（6/146）と報告されているが，われわれの施設では前交通動脈瘤手術48例中2例，4.2%とほぼ同様であった．術前の画像から多発性動脈瘤を予測して十分な術野をとり

temporary clipを用いて破裂動脈瘤を見逃さずに処置することが大切である．

69 Median artery of the corpus callosum を有する破裂前交通動脈瘤4例の検討

沼上 佳寛・西村 真実・上山 浩永
斉藤 敦志・古野 優一・西嶋美知春

青森県立中央病院脳神経外科

【背景】前交通動脈（Acom）complexは，Willis動脈輪の中でもvariationが多く観察される部位である．このvariationによっては，この部位の手術，特にAcom動脈瘤clipping術に困難を来すことがある．今回我々は，median artery of the corpus callosum（median artery）を有する，破裂Acom動脈瘤症例について検討を行った．

【対象】H12年よりH17年の5年間で，当科に入院したくも膜下終結例のうち破裂Acom動脈瘤が確認された症例は152例ある．このうち4例（2.6%）にmedian arteryを認めた．

【結果】女3例，男1例，平均74歳．1例はG4，血管撮影後再破裂を来し死亡．1例は，G3，未破裂中大脳動脈瘤を合併しており，pterional approachで進入．術後median arteryは閉塞しており，SD．他の2例はinterhemispheric approachで進入しmedian arteryがよく観察できた．1例はG2で発症し，結果はGR．1例はG3，急性期に部分的coilingを施行，慢性期にclippingを行い，GRであった．

【考察】median arteryを有する破裂Acom動脈瘤に対するsurgical approachは，Acom complexが比較的良好に観察できるinterhemispheric approachが有利であるように思われた．median arteryの存在はAcom動脈瘤のpterional/inter-hemispheric approachの選択の際の一つの要素と考えられた．